

12月8日は何の日？ 太平洋戦争開戦の日です。それまでの時代の流れを追ってみよう。大正時代(1912~26)にはデモクラシーの風潮が強まり、それと共に一方では社会主義思想も一部には広まった。しかし、一般には忠君愛国の精神や国家主義・軍国主義の風潮が、明治の後半期から固く根を下ろしつつあった。昭和に入ると、軍国主義の動きが強まり、深刻な不況が続く中で軍や右翼の発言が強くなった。昭和6年(1931)満州事変が引き起こされてからは、ファシズムの動きが台頭した。昭和12年には日中戦争が始まり、国は戦時体制に入った。こうしたなか教育界では軍国主義教育、忠君愛国主義教育が徹底して行われたが、今回は土浦中学の軍国主義教育について見てみよう。



射撃訓練で匍匐前進する土中生(昭和5年)

強化拡大される軍事教練

大正1(1912)年、『陸軍現役将校学校配属令』が公布され、中学校にも現役将校直接の指導による軍事教練が必修科目となった。明治時代から行われてきた発火演習の他に、教練が毎週2時間設けられた。そして発火演習は「野外教練」と呼ばれるようになり、その回数も年を追うごとに多くなった。昭和7年までは年3回から8回程度だったものが、8年には12回、翌9年には1回行われた。原則として学年単位で行ったが、時には複数の学年が合同で実施することもあった。

科目の教練や野外教練の内容は、直立不動、挙手敬礼、行軍、木銃を握っての匍匐前進、射撃訓練、銃剣による刺突訓練、斥候、飯ごう炊飯、様々な訓練を総合した部隊訓練などで、まさに軍事訓練そのものであった。

一、二年時は直立不動、挙手敬礼、行軍、匍匐前進、三年時はそれらに加えて射撃訓練が、四、五年時は部隊訓練を中心としたものになった。昭和に入ると、軍隊の演習には、見学ばかりでなく、それに参加するようになった。昭和4年11月の石岡・志筑方面で行われた陸軍大演習には全校生徒が見学に行っていた。昭和6年11月には、谷田部方面で実施された近衛師団の機動演習に、四、五年生213名が、7日午後8時から8日にかけての払暁演習に参加した。この時の土中生たちの行動は統監部に強い印象を与えた。11月1日付の『いはらき新聞』に「統監部を感服した土中生の活躍」の見出しで、その様子を掲載している。

兵営宿泊訓練実施

昭和の初めごろから水戸歩兵第二連隊の中で、二泊三日の兵営宿泊訓練も実施するようになった。毎年10月に行われ、昭和11年まで続いたが、これには四年生全員が参加した。昭和6年4月に発行された『進修』第33号には、これに参加した生徒達の感想文が多数載

せられている。そのなかで、生徒達は特に次の三つのことに驚いている。一つは、兵営において、上官の命令が絶対であり、礼儀や、秩序を重んじる軍紀が厳正であったこと。二つは、隊員の動きの機敏さであった。たとえば、機関銃隊訓練では、指揮官の命令一つで馬の背に載せてある機関銃の部品を降ろし、組み立て、いつでも発射できるように並べ、また分解して馬の背に載せるというその操作の迅速性にびっくりしている。三つ目は、実弾射撃を初めて経験したことである。

連合演習 開始

連合演習は県下の全中等学校生を集めて行う演習で、昭和13年から実施された。13年11月4日から翌日にかけて行われた筑波山麓での最初の連合演習には、土浦中学校の五年生全員が参加した。この演習は、12日を短時間での強行軍、月明かりの中を行軍しての夜襲。寒さに震えて眠れなかった農業倉庫宿泊など苛酷なものであった。翌14年9月には、栃木県金丸ヶ原において二泊三日の連合演習が、中学生三千名を集めて行われた。16年11月、筑波山麓での連合演習には七千名が動員されたという大規模なものであった。

兵営宿泊訓練・連合演習を体験して

兵営宿泊訓練や連合演習を体験して、生徒たちはどのような思いを抱いたのであろうか。昭和5年行われた兵営宿泊訓練に参加した四年生の感想文には、どれも軍人・軍隊に対する尊敬の念、臣民としての自覚が述べられている。生徒の一人鶴町朝次は「……命を惜しまず、出征の途に上がるあの勇敢な軍人に対し、責任と地位をわらわらめたい。任仕はたはなることを自覚した。第三は……大日本帝国の臣民として人間的なことを期す次第である」とその思いを述べている。このように兵営宿泊訓練は、生徒たちの帝国臣民としての自覚と責任を深める絶好の行事となった。



査閲官を迎える土中生

隊の中の売店で買った菓子や果物を食べたりしたことなど、兵営宿泊訓練はまた楽しい行事でもあったのである。

連合演習についてはどうであったか。最初の演習に参加した五年生の保立和男は、「嗚呼！ 今にして思ひ起す所の連合演習は『なん』と云ふ語は『なん』……『軍への感謝』と『精神力の偉大』自分々々の演習の戦禍の中に於て最も痛切に感じたのはこれである。今軍は支那において……身命を賭して努力してゐることを思ふ時、我等の胸は実に感謝の感で一杯になるのである。……又自分々々の戦禍の中に『精神力の偉大』を体験した。あのころを通じて一名の落伍者もなげ無事と演習を終つたのは実に精神力に『なん』のあつて……」多くの生徒が抱いた思いはこのようなものではなかったか。

査閲：学校の最大行事

軍国主義教育の中で大きな役割を果たしたものが査閲である。『陸軍現役将校学校配属令』は、陸軍大臣は将校を配属した学校に現役将校を派遣して教練実施の状況を査閲させることができると定めていた。査閲はこのために従つて年一回実施され、軍から派遣された査閲官が来校し、実際の教練を見て評価を下した。土浦中学の場合、査閲官は水戸歩兵第二連隊長かその代理者であった。その評価は生徒の陸士や海兵の可否をも左右するほどの大きな影響力を持っていたので、配属将校をはじめ学校中が全神経を使って熱心に取り組んだのである。